

与えられるものから道も拓ける

松崎 真日 教授

(韓国語教育学)

朝鮮語（韓国語）を教え始めてだいぶ時間が経った。私は大学の学部時代に朝鮮語を専攻したわけではないし、そもそも韓国に興味や関心も薄かった。さらに言えば、外国語の学習は苦手、できるだけ遠ざけたいものであった。

私と朝鮮語との出会いは大学の第二外国語である。外国語に興味はなかったけれども、英語以外の外国語の中からどれか一つを選択して学ばなければならなかった。いわゆる選択必修である。選択肢としては、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、朝鮮語があり、第3希望まで書いて、その中から学習言語が決まるというものであった。私は第3希望として朝鮮語を書き、見事に？朝鮮語を学ぶこととなった。実のところ、5つの中の第3希望であるから、それは私が選択したものとはとても言えないのであるけれども。こうして与えられる形で私の朝鮮語学習がスタートした。

当時私が専攻し勉強していたのは日本民俗学であり、日本の伝統文化を学ぶ学問であった。柳田国男に代表される昔の日本の姿を調査する学問である。このように私の興味や関心はもっぱら日本らしい伝統文化に向いていたため、朝鮮語の学習には気持ちが入らなかった。当然、習得が進むはずがない。前期が終わった時点で落第の黄色信号が点滅した。後期に相当良い成績を取り挽回しない限り落第するのである（当時は、通年科目であったので、1年間の学習を終えて単位が取得できた）。個人的なことになるが、私は4人兄弟の長男で今後弟や妹の進学も予定されていたので、経済的な面で留年は許されない状況であった。18歳の自分にとっては絶体絶命のピンチである。

そこから朝鮮語の猛勉強が始まった。18歳という年齢は、学ぶには最適の年齢である。必死に勉強をしたら、教科書にある単語や文法はほぼ頭に入った。苦手意識があり遠ざけたかったはずの外国語学習であったが、分かるようになると楽しく感じる場所もあり、その後、何とか2年間で単位を取得できた。朝鮮語と私は、このように私の希望とは全く逆に、与えられたものして出会ったのである。そして、単位取得のためという極めて実利的な目標のために勉強していた私が、現在では朝鮮語を教えているのであるから、人生はわからないものである。当時の落第寸前の自分には想像すらできなかった道といえる。

大学には様々な授業がある。興味や関心に合わないものもあるだろう。サークルなどで、思ってもみなかった業務（広報、会計、幹事、OB対応など）にあたることも多い。社会に出てもそうである。就職先、配属先、担当業務、こういったものは希望通りになることはむしろ少ない。人との出会いなどは与えられるものの代表のようなものである。

世の中とはそういうものだと思う。自分の希望などごくごく狭い範囲のものであり、関心が向くのは限られた狭い範囲であろう。そのような中で、誰もが道を拓いていく。私の朝鮮語のように最初は気乗りしないものであったかもしれないが、その中に面白さや意義といったものを見つけて歩みを進めることはよくあることだ。

私はキリスト教主義の学校に勤務するのは日本では初めてである。チャペルで学生の皆さんと顔を合わせることになるとは、以前は想像すらできないものであった。そういう意味では、チャペルでの時間も与えられたものといえるが、これから意義や面白さを見つけていきたいと思っている。
